

沖縄のグスクとその空間的配置に関する若干の検討

出田 和久

- I. はじめに
- II. グスクとは何か—グスクの性格をめぐる諸説
 - (1) グスクの出現と按司の登場
 - (2) グスクの性格をめぐる諸説
 - (3) 本稿で対象とするグスク
- III. グスクの立地環境
 - (1) グスクの分布
 - (2) グスクの立地と地形・地質・土壌との対応
- IV. グスクの実体
 - (1) グスクの構造
 - (2) グスクの防御性に関する規模別の検討
 - (3) 石垣のないグスク
- V. グスクの空間的配置からの若干の検討
- VI. おわりに

I. はじめに

1992年に首里城が復原され、美しい自然と風土に恵まれた沖縄県に新たな観光資源が加わった。沖縄の観光資源は自然だけではない。かつての琉球王国の王府であった復原首里城は、残念ながら世界遺産には登録されなかったが、首里城の復原を通じて歴史的な遺産にも近年は関心が向けられている。その底流には本土復帰後四半世紀を経て、沖縄県民の自らのアイデンティティを求め^{よすが}る意識があり、首里城復原にはその縁としての象徴的意義がみてとれよう。

しかし、沖縄県では第2次世界大戦での沖

縄戦による破壊もあって、国指定クラスの文化財の数も少なく、歴史的遺産としてはこれまでは那覇市の首里城や本部半島の今帰仁城などを除くと広く知られたものは少なかった。そのような中であって沖縄県の国指定史跡27件のうち半数近い12件がいわゆるグスク関係遺跡で占められ、沖縄県における歴史的遺産の中でのグスクの重要性が目される。グスクがいわば琉球王国前史の所産でもあることを考えるとむべなるかなとの感も深い。1983年には沖縄県教育庁文化課から沖縄本島と周辺離島におけるグスクの分布状況が『ぐすくグスク跡分布調査報告書(I)』としてまとめられ、1994年の『ぐすくグスク跡分布調査報告書(III)』の刊行により沖縄県におけるグスクの全体の分布が明らかとなった。このような状況のなかで近年グスク関連遺跡の調査や整備が進展し、考古学的な側面からグスクの構造や機能に関するデータが蓄積されつつある。しかし、そのような調査はまだ一部にとどまっており、グスクをめぐるはその多様な実態のためもあり、機能をはじめとして十分に解明されていない面も多い。これまでグスクの性格等に関して様々な見解が出され、グスクだけではなく周辺の村落との関連などにも関心が向けられている。

そこで、本稿では沖縄本島を対象地域として、グスクの分布・立地を周辺村落との関わりに注意しながら概観し、平面構造の明らかなグスクを中心に機能的側面についても検討

を加え、さらに空間的配置に関してもメソスケールで若干の検討を試みることにしたい。

II. グスクとは何か—グスクの性格をめぐる諸説

(1) グスクの出現と按司の登場

沖縄における農耕の開始は本土に比べると1,000年以上遅れるという¹⁾。この農耕開始期については今後さかのぼる可能性はあるものの、農業の本格的展開は12世紀以降のことのようである。農耕の開始は原始共同体に大きな刺激を与え、技術的進歩にともなって生産力が上昇すると、その農業共同体のあり方にも様々な刺激が加えられ、変化が現れたであろう。まさしくそのような時期すなわち12世紀の終わりから13世紀のはじめころにかけて琉球各地にグスクが出現し、統一王朝の成立により15世紀半ば以降その築造は概ね終息する。ここでは琉球における共同体論を展開する余裕はないが、グスク出現の背景には地縁的な共同体への動きがあるものと考えられ、このような中で登場するのが按司と呼ばれる首長たちである。この時代は一般にグスク時代と呼ばれ、グスクは按司の居城であったとされ²⁾、そのような伝承をもつグスクも多い。しかし、グスクの調査が行われ、その多様な実態が明らかになるにつれてこの見解にも疑問が出されるようになった。

そこで、つぎにグスクの性格をめぐる代表的な3つの説についてみていくことにしたい。

(2) グスクの性格をめぐる諸説

1) 城郭説：早くは鳥羽正雄が、沖縄では「城」の字を「ぐすく」あるいは「ぐしく」と読むとして、「城」の種類を国主の城、按司の城、それらの支城、貯蔵所の城、海防の城の5種類に分け、立地や構造についても検討を加えた³⁾。多数あるグスクのうち大部分が按司の居城とその支城が占めるとし、いわばグスク=按司居城説とでもいうべきものであっ

た。比嘉春潮がその著『沖縄の歴史』で「沖縄の至るところに古い城の跡がある。…略…これらの城はかつては按司の居城であった。」として⁴⁾城郭説が一般化した。また、鳥越憲三郎もこの見解を受け入れ、その著『琉球宗教史の研究』で「…この新しく擡頭した政治の実権者を按司という。この按司たちは各々要害の地に城(gushiku)を築いた。…村々には古い城址があり、小さなこの島に多くの城が乱立しているのは、群雄の係争が如何に甚だしかったかを示すものであり、驚嘆に価するものである」とした⁵⁾。

こうしてグスクは城郭であるとする見方が通説化していったが、これに異を唱えたのが仲松弥秀であった。

2) 聖域説：仲松はグスクの立地・分布や構造からグスクが城であるとする考えに疑問を呈し、グスクとは「古代祖先達の共同葬所(風葬所)だった場所であり、石囲で囲まれた神のいます、あるいは天降る聖所と、神を礼拝する拝所とを一つにした聖域である」とした⁶⁾。さらに、「私も、”グスク”の中には城になっているのがあるとするには条件付に賛成である。しかしグスク即ち城説は否定したい」とした⁷⁾。同様に古代史学の平野邦雄は「グスクは単なる城郭の謂いではない。それは小高い丘陵の石垣によって囲まれた共同体の神聖な場所に発し、日本の古代の城(しき)に相当する。つまりそれは神の住居であり、御嶽の観念とも重なり合う。」とした⁸⁾。このほか民族学の国分直一も仲松に賛意を示した⁹⁾。このような、グスクが本来拝所などの聖域であったとする見方に対して、考古学的な調査が進むにつれて疑問が呈された。

3) 集落説：発掘調査の成果を踏まえて、城郭説や聖域説を否定し、集落説を提起したのが嵩元政秀である¹⁰⁾。なお、早くに田村浩はグスクを集落と関連させてとらえ、「古代期村落発生ノ地点ハ『城』gusikuヲ以テ代表的形態トス。…略…gusikuハ「村」「城」何レヲ意

味スルト雖モ、余ハ古代ノ村落發生前ノ集團部落ト解セントス。」と述べている¹¹⁾。寓元は、グスクをA・B・Cの3式に分類し、基本的にA式は政治的権力者の居城、B式は原始社会の終末期から古代社会に移行する時期頃の防御された、または自衛意識をもって形成された集落、C式は発生当初からの墓地や拝所であるとし、特にB式について、グスクから出土する遺物が生活遺物であることやそれらが村落出土の生活遺物よりも古式であることを強調し、数的にも最も多いとした。

このいわば集落説とでもいうべき見方に対して、聖域説を支持する国分直一¹²⁾や仲松弥秀¹³⁾などから、グスクは水の便が悪い、生活遺物は祭事のためのものではないか、グスクと同様の遺物が集落内からかなりの量出土するのではないかと批判が行われたが、両者の間にはグスクの具体的な空間的範囲や年代観などをめぐり食違いがみられた。

また、高良倉吉は、一見対立しているように見える上記3説は、歴史的観点からみれば基本的には矛盾しないとして、共同体論を視点に入れつつ、グスクは高地性集落であり、「共同体的な聖域によって精神的に結合された原始共同体」とし、防御集落のなかに聖域があるようなグスクB式の段階から、A式の城塞的グスクが出現する段階、さらにその後C式のグスクが出現する段階という歴史的展開を想定し、統一的に捉えようとしてモデルを提示した¹⁴⁾。これに対して友寄英一郎はグスクの普遍的概念として「石囲いの高い処」と規定し、グスク集落説を認める限りこれを軽視したモデルは不当であり、B式グスクと聖域グスクは別個の存在であるなどとし、新たなモデルを提示した¹⁵⁾。

以上のように見解は様々で、グスクの実態も多様であることが分かるが、考古学的に実体の明らかな存在としてのグスクには、少なくとも次のような点のいずれかに該当することが指摘できる。

①野面積み石垣・切石積み石垣・堀切・土塁など何等かの囲郭施設を有する。

②囲郭施設はないが小規模な石積み施設を有し、拝所などとなっている。

③小高いところにある。

(3) 本稿で対象とするグスク

このように様々なグスク論が登場した背景にはグスクの多様な実態があり、グスクをめぐる論争はこのことを明らかにした。今日グスクという語が指し示す内容にしたがってまずグスクを整理・分類し、その後それぞれの種類毎のグスクの機能なり性格について検討すべきであろう¹⁶⁾。しかし、本稿ではグスク全般について論じる余裕はないので、極めて便宜的ではあるが検討対象とするグスクは、沖縄県教育庁文化課による分布調査によりグスクとして報告されたものとし¹⁷⁾、分布密度も高い沖縄本島を対象地域とすることとした。この調査報告では、文献および地域住民の間で伝わっているグスクについて場所の確認を行い、その概要と位置を記述しているが、これら以外にも「現在地元ではグスクと呼ばれてはいないが、高いところに位置していてグスク時代遺物が出土するグスク様の遺跡も含めることにした」¹⁸⁾とあり、実際にはグスクと呼ばれていないものも若干含んでいる。

具体的には、まず『ぐすく』によりグスクの分布図を作成し、メソスケールで地形や地質とグスクの分布との関連の概要を把握し、立地上の特色を明らかにする。次に、必要に応じてグスクの構造や規模に関して個別的検討を加える。最後に、主要なグスクの配置に関して検討する¹⁹⁾。

III. グスクの立地環境

(1) グスクの分布

沖縄本島におけるグスクの分布をみると(図1)、地域的には南部に多く、北部に少ない。北部地域の基盤はおもに中生代や古生代の堆



図1 沖縄本島におけるグスクの分布

積岩からなり、山地が広く展開し、低地は全般的に少なく、沖積地が辺土名や羽地、名護にややまとまって見られる以外は、主谷下流の谷底部くらいである。したがって農業適地には乏しく、人口の分布も希薄である。これに対して南部の島尻地域は琉球石灰岩や新第三系泥岩が広く分布し、波浪状の地形を呈している。前者はさまざまな高度に分布し、台地状地形をつくる特徴があり、そのへりは急崖をなす。特に糸満台地には石灰岩堤²⁰⁾が数多くみられる。「石灰岩地域においては、自然泉が多く、表土は泥性でも下層の石灰岩への雨水の浸透が容易なことから村落立地には最も良い条件を備えていた²¹⁾」ようで、集落も多く立地し、比較的農業も盛んである。このように石灰岩層は帯水層として有用とされている²²⁾。

グスクの性格を考えるときにその立地がしばしば問題とされてきたが、「岩石からなる丘陵」、「小高くなった岩丘」、「岬々たる岩山」、「石灰岩台地の先端部」あるいは「たんなる

樹林地」などに立地するとしていた²³⁾。これに対して、安里進はグスク時代の遺跡の分布が石灰岩台地や谷底低地・海岸低地に密接に結びついていることを明らかにし、それが農耕生産力と関わることを示唆した。必ずしもグスクそのものの分布ではないが、客観的な地理的な環境との関連で捉えようとした点は注目される²⁴⁾。そこで、本稿ではまず地形等とグスクの立地についてみてみることにする。

(2) グスクの立地と地形・地質・土壌との対応

グスクは台地や小高い丘の上に立地するものが多いとされてきた²⁵⁾が、グスクの位置する標高をみると、4分の3が100m以下にあり、そのうちの44パーセントつまり全体のほぼ3分の1が標高40～69mにある。標高100mを超えるもののうち70パーセントが150m以下であ

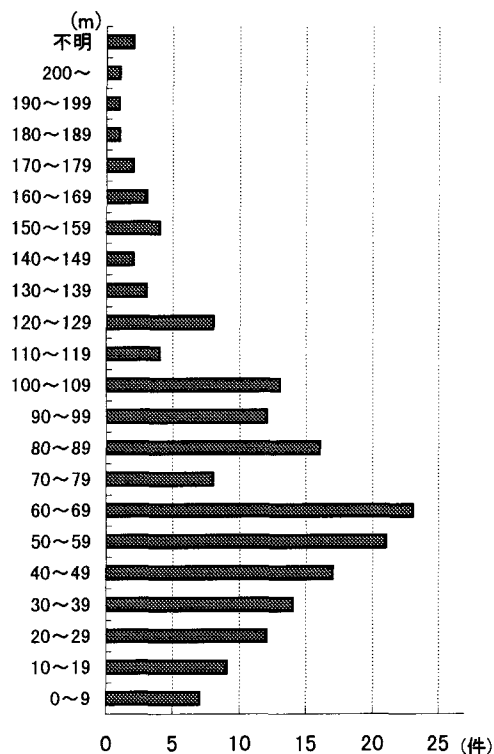


図2 沖縄本島におけるグスクの標高別分布
『城(グスク)一城に語らせた地域史—』(1992)より作成

り、余り高い山の頂きには存在しない(図2)。このことはグスクが集落の位置からさほど離れてはいないことを示唆している。

つぎにどのような地形に立地するかについて、分布の濃密な中南部地区の勝連半島以南を対象地域としてメソスケールで検討を加えてみたところ、108グスクのうち約8割が石灰岩台地上あるいはそれに接するような位置に立地しており、カルスト地形との密接な関連がうかがえる(図3)。中南部地域は全般的に波状の丘陵地形を示し、谷斜面は緩く浅い。この地域の石灰岩台地は標高が100mを超える

ところは一部に過ぎないので、標高が100m以下に多いことも整合的である。また、その位置は石灰岩台地の中央部ではなく、端部・縁辺部であるものが圧倒的であり、台地中央部にある場合は石灰岩堤上やそれに接する位置にある。いわば地形面の境にあたる部分に立地することが多い。このような地形面の境界部分には自然泉の湧出がみられることが多い。石灰岩台地以外のものはほとんどすべて小起伏丘陵に立地している。石灰岩の分布に限られ、山地や丘陵の起伏が大きく、急峻な地形で海岸線が迫る北部にはグスクの分布が

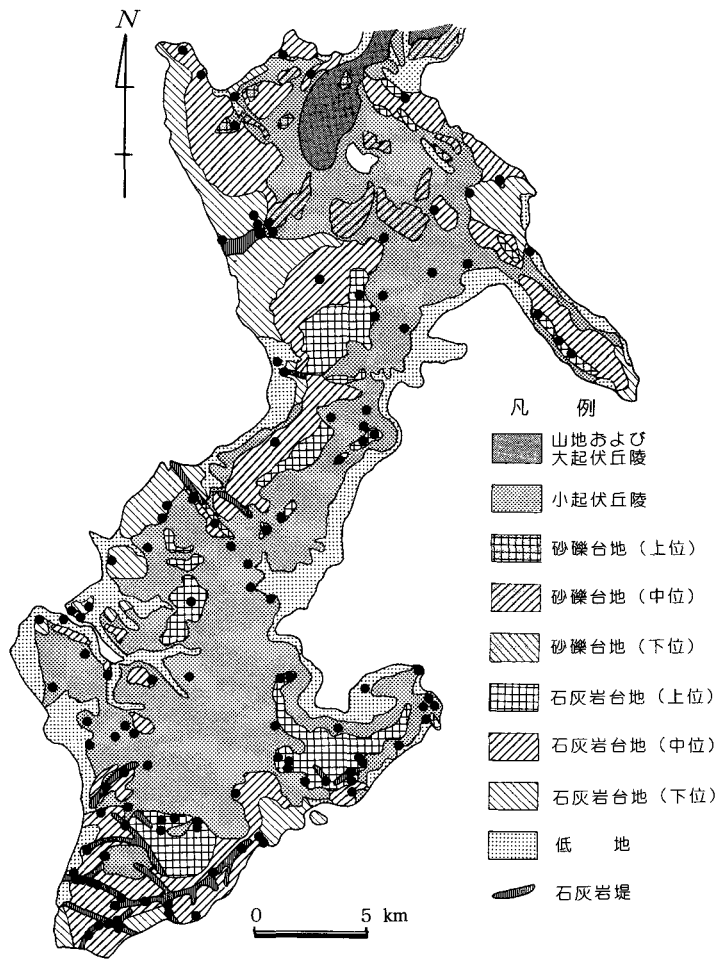


図3 地形とグスクの分布

『土地分類図(沖縄県)』の地形分類図をもとに作成(一部改変)

少ない²⁶⁾ことと裏腹の関係にあるといえる。

表層地質との対応も、当然石灰岩と密接な関連があることがうかがえ、石灰岩以外では新第3系泥岩上や沖縄市北部付近では石灰岩質砂岩・礫岩の上に立地している。すべてのグスクに石垣が残っているわけではないが、約7割について石垣の残存が報告されている²⁷⁾ことも合わせて考えると、石積みの囲郭施設を構築するには大量の石材が必要とされたであろうから、石材に適した琉球石灰岩石が分布するところは、石材供給の面からも石灰岩の入手に便宜が大きく、輸送距離が短くて済

む場所であるといえよう。

土壌についてみると²⁸⁾、大半のグスクの周辺には細粒灰色低地土壌、暗赤色土壌が分布し、ごく一部に乾性黄色土壌がみられる。沖縄本島では具志川市南部から南には泥灰岩を母材とする残積性未熟土壌が広く分布するが、この土壌はph 8前後のアルカリ性を示し、粘土含量が高く内部排水不良で、粘着性・可塑性ともに非常に強く、耕耘の困難な土壌ではあるが肥沃で、現在ではサトウキビの生産力の高い土壌とされている。細粒灰色低地土壌は台地や丘陵地を開析した谷底部に分布し、暗

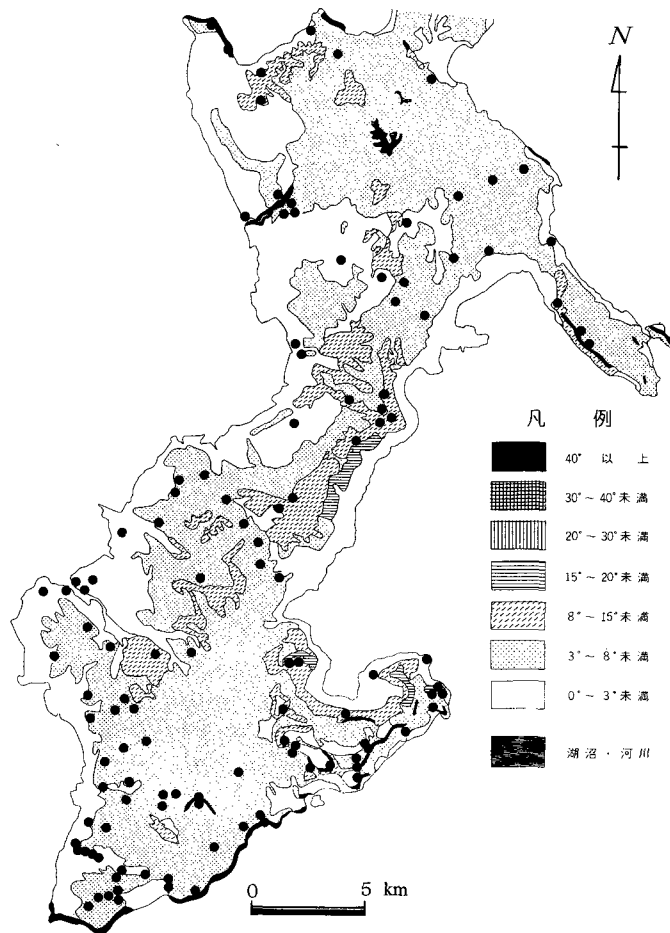


図4 傾斜とグスクの分布
『土地分類図（沖縄県）』の傾斜区分図をもとに作成

赤色土壌は琉球石灰岩や古生層石灰岩に由来する土壌で、県下では最も肥沃な土壌とされている。

つぎに傾斜区分図にグスクの分布をドットすると大半が傾斜が8°未満のところに収まる(図4)。メソスケールでの検討であるので、傾斜はグスク周辺の傾斜ということになるが、この8°未満という傾斜は基本的には耕地化適地とされる。

以上のようなことから考えると、地下水位などがグスク時代と全く変化がないとは必ずしもいえないため、多少の留保は必要であるが、広い面積を占め、肥沃ではあっても耕耘の困難な残積性未熟土壌には中城グスク、大里グスクなどの大規模グスクや棚原グスクのように按司の居城であったとの伝承をもつグスクが例外的にみられる程度であるのに対して、周辺の地形や土壌条件が農業に適していたと考えられるところに大半のグスクが立地していたといえそうである。このことは、グスクの大半が少なくとも集落や生産地との関連を有しながらその立地を選択したことを示唆している。つまり、グスク自体は集落でないとしても、集落とは密接な関連をもち、単なる「城」では律しきれない要素を抱えているといつてよいであろう。

IV. グスクの実体

グスクの考古学的調査の進展により、少なくとも考古学的な側面からグスクの実体をかなりの程度明らかにできるようになった。そこで、以下においてグスクの構造と規模を中心にまとめることにしたい。

(1) グスクの構造

新城徳佑は地形上の「構造形式」として、山の頂上あるいは中腹に築かれた城を山城形式、山の頂上や丘陵上とそれに続く平地も取り入れて築かれた平山城形式、平地に石垣を積みまわして城壁を築いた平城形式、海に突

き出た岸壁を利用して築かれた海城形式とに4分類した²⁹⁾が、これは「構造形式」というよりも立地とするのが適切である。

グスクとされている遺跡は、報告書『ぐすく』や『沖縄の城跡』によればその約7割に石垣が残存している。グスクにこの石垣を含めて崖や岩などがめぐっていたか否かについては報告等から必ずしも正確には判断できないが、添えられた図面などを見ると、ある程度めぐっているものが多く、一般には完全ではないものの囲郭的施設があるとされてきた。グスクの構造は当然規模とも関連するが、グスクの規模は首里城の約6万3千平方メートルや今帰仁城の約7万9千平方メートル³⁰⁾という数万平方メートルもあるものから数十平方メートル程度のものまで実に様々であり、構造も変化に富む。しかし、近年は本土中世の城郭論・縄張り論を活用した議論がなされるようになり³¹⁾、石積みで囲まれた部分³²⁾、あるいはそのような施設のない単なる削平された平坦地を曲輪と称し、曲輪が単数か複数かによる単郭式、複郭式あるいは連郭式などと呼ぶことも多く、各郭を一の郭、二の郭等のように呼び、かつてのように本土の近世城郭のような本丸、二の丸というような用語は使用されなくなっている。

縄張り論の導入は、中世城郭研究の牽引者である村田修三が述べるように「軍事施設であることに独自性のある城郭を扱う場合、まずその軍事面にせまる縄張り研究が重視されねばならない」³³⁾から、基本的にはグスクが軍事施設であることを前提にしてはじめて有効なものとなる。県文化課による1977年度以降のグスクの分布調査など近年では縄張り図的な図の作成もかなりのグスクに及ぶようになり、縄張り論の導入を主張する当真嗣一は、縄張り図をもとにグスクがすぐれて軍事的施設であるとの明確な主張をしている³⁴⁾。そのなかで具体的にいくつかのグスクの縄張り図を示し、その防御的・軍事的機能の検討を行っ

ているが、小規模グスクについては検討されていない。

先にも触れたようにグスクは規模に大きな差があり、一律に捉えることは適当ではないだろう。少なくとも数万平方メートルオーダーの大規模グスク、数千平方メートルオーダーの中規模グスク、数百平方メートルオーダーの小規模グスクと3段階くらいに分けて、その構造・機能を検討すべきであろう。軍事施設であれば、本格的な城塞、砦、見張り所あるいは弥生時代の高地性集落論でみられたような逃げ城といったものとの関連や新潟県の山間地にある小型城郭で指摘されているような集落の展開との関連³⁵⁾なども検討されてよいであろう。

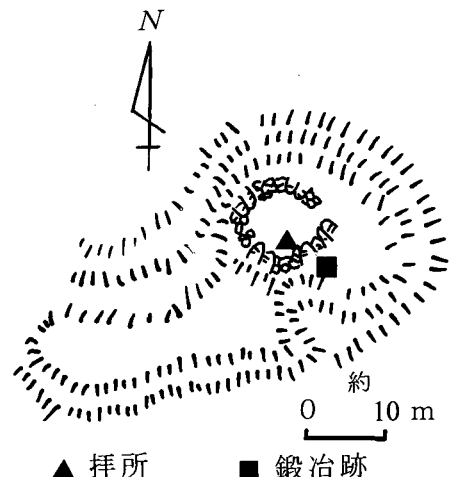
小規模グスクは発掘調査もほとんどなく、名護市の屋我グスクが例外的に1980年に小規模な発掘調査が行われた程度である。詳細は不明であるが、『ぐすく』などの報告の記載をみると、表面採集される遺物としても顕著なものはあまりなく、輸入陶磁器類は全く見られないか、非常に少ないようである。これに対して比較的規模の大きいグスクや按司に関する伝承を有するようなグスクはほとんど輸入陶磁器類が発掘・採集されていることから中国からの本格的な物資の流入が伺え、このような動きの中で規模の大きな、城塞的な構造を備えたグスクの出現を理解することができるであろう。中国における宋の再建＝南宋の成立を契機として海上貿易が隆盛に向かい、中国南部からの文物が沖縄へ流入してくるようになり、さらに明成立（1368年）の4年後には、楊載を団長とする使節団が「琉球」に派遣され、三山の一つ、中山王察度に入貢を促し、これに答えて察度は使節団を派遣したが、この動きは山北・山南にも波及し、競って入貢することになる³⁶⁾。このような状況のもとで、中国の影響を受けて初期の小規模なグスクから本格的な城塞としてのグスクへの発達が見られるようになる³⁷⁾。

安里は石積みグスクの規模の変遷を図示しながら、石積みグスクの基本的方向が、大規模化と多郭化であるとして、千数百平方メートル以下で小規模・単郭構成のグスクから2千平方メートル前後以上の大型・多郭構成のグスクの出現の間に画期をおくべきとした³⁸⁾。このことも前記のような沖縄をめぐる状況を考慮すれば一層理解しやすくなる。

(2) グスクの防御性に関する規模別の検討

1) 小規模グスクの場合

屋我グスク：数百平方メートル以下の小規模グスクで、縄張りあるいは平面図が明らかになったものはほとんどない。僅かに名護市の屋我グスクが1980年に小規模な発掘調査が行われた位であるが、それによると標高約36メートルの丘陵の頂部に石灰岩の石垣と石灰岩の露頭により囲まれた直径10メートルほどの平坦地があり、屋我グスクのイビ（拝所）がある。南側斜面では11世紀の中国銭や南宋の青磁とともに多量の鉄滓・焼土などが出土しており、13世紀後半頃の鍛冶場跡と考えられている。グスクの西麓には屋我の集落があったが、1858年に現在の墨屋原に移転したという³⁹⁾（図5）。石垣構築の時期ははっきりしないが、このような立地からはある程度の



▲ 拝所 ■ 鍛冶跡
図5 屋我グスクの平面形態略図
『名護市の遺跡(2)』より作成

防御性は期待できよう。しかし、頂部の平坦面の面積が100平方メートルにも満たず小規模であることから、外敵の集落への侵入を監視する見張り所的なものを考える方が適切であろう。

船越グスク：丘陵頂部の石灰岩塊上にあり、頂部は東西約12メートル×南北約25メートルの平坦面となっている。石垣の外壁面は南側と西側の一部に残るが、内壁はほぼ全体をめぐるように残っている。南東部に門の遺構が残っている。内部には幅約1メートル、深さ1～3メートルの岩の亀裂が3方に走り壁面に達している。石積みの種類については記述がない(図6)。グスク密集地ともいえる南部の玉城村に位置し、立地からは防御を意識したものともみることができ、近辺には糸数グスクなどの規模の大きなグスクもあり、機能的にはこれらとの関連で捉える方が、単独で機能していたとみるよりも理解しやすいのではなからうか。グスクの西には船越集落がある。

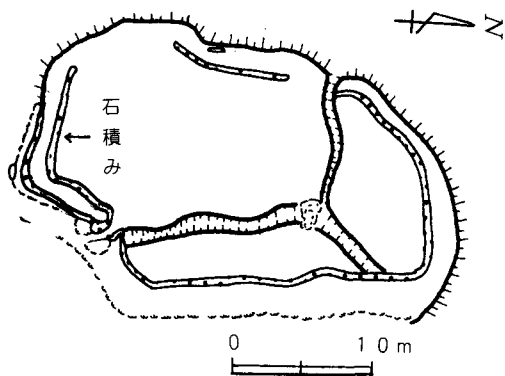


図6 船越グスクの平面形態
『ぐすく』(1983)より作成

山城グスク：石灰岩の岩山にある。南100メートルには上里グスク、東300メートルにはサキグスクがある。グスクの面積は約50平方メートルときわめて小規模であるが、石垣は堅固で、高さ10メートルにも達するところもあるとするが、石積みの種類については記載がない。周辺には古くからの拝所や聖域が分

布する⁴⁰⁾。糸満市に位置し、周辺には多くのグスクが分布している。石垣が高さ10メートルにも及ぶということでその防御性はきわめて大であるが、このような規模で10メートルにも達する石垣を築かねばならなかった事情は何であろうか。特殊な機能を有していたのか等注目されるが、遺物も表面採集では特別なものは見つかっていないようである。グスクの北麓に山城集落がある。

2) 中規模グスクの場合

伊波グスク：標高87メートルの琉球石灰岩の丘陵上にあり、東北側は断崖になっている。石垣は野面積みで、東北部分には施されていない。北西、西、南東の3カ所に門跡がある。いわゆる単郭式で、面積4,500平方メートルほどである。頂部に500平方メートルほどの平坦地がある。14世紀前半の構築で、伊波按司の居城と伝えられる⁴¹⁾。急崖部分には石垣が構築されていないことは、単に石垣を巡らせることに意義があったのではなく、石垣が防御を意識したもので、不必要部分には構築しないことを端的に示している(図7)。この程度の平坦地の面積があれば郭内に建物も存在したことが予想される⁴²⁾。集落はグスクの南に展

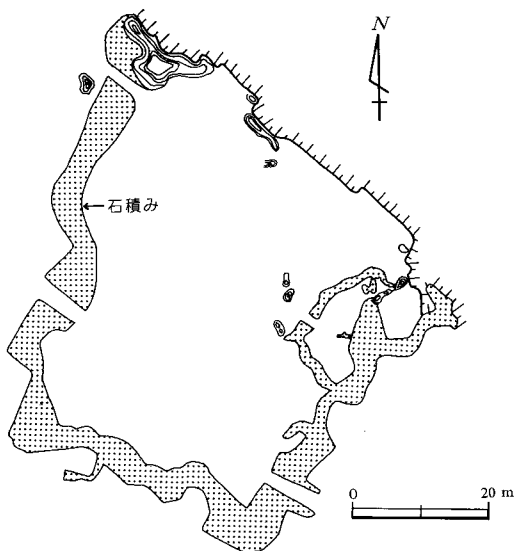


図7 伊波グスクの平面形態
『沖縄文化財調査報告』(1978)より作成

開している。

知念グスク：標高約100メートルの琉球石灰岩の台地頂部から一段下がった南端部に立地し、南東側から西側は急崖で、北側に緩傾斜している。グスクは上下に2つの郭から構成され、上方の郭は野面積みの石垣で、約10メートル下方の郭は切石積みで、古城、新城といわれている。知念按司の居城との伝承があるが、新城は第二尚氏王朝の第3代国王の尚眞の異母兄弟にあたるともいわれる内間大親により築城されたとの伝承もある。新城には東と北にアーチ型の門がある⁴³⁾(図8)。石積みの方法が上下の郭で異なり、グスクの石積みは野面積みから切石積みへと変化したことが知られているので⁴⁴⁾、長期にわたり修築されて使用されていたことを示している。防御に関しては北側の弱点をいかにカバーするかが問題であるが、北側の城壁は分厚く、高さも3メートルほどはあったようである。集落は現在西麓の標高50メートル前後のところにあるが、かつては北側にあったということである。

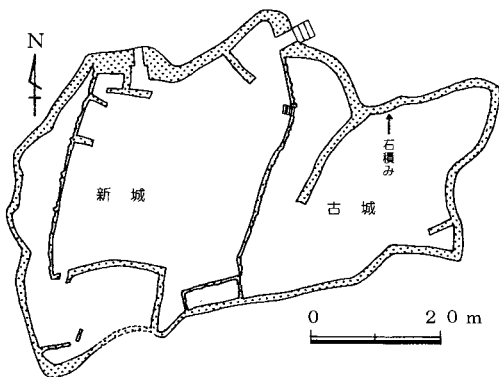


図8 知念グスクの平面形態
『沖縄文化財調査報告』(1978)より作成

3) 大規模グスクの場合

今帰仁グスク：古生層石灰岩の丘陵上に築かれ、山北王の本拠地であったが、築城年は不明である。発掘調査によれば13世紀の終わりから14世紀のはじめにかけて創建されたようである。当初は規模も小さく石垣もなかった。14世紀の前半から中頃にかけて高い石垣

が構築された。1416年には中山の尚巴志により山北王^{はんあんち}攀安知が攻め滅ぼされ、今帰仁城には北山監守が置かれ、1665年に廃城となった。約7万9千平方メートルにも及ぶ大規模なグスクで、構造・縄張りも複雑で、主郭を中心に大小8郭からなる連郭式とされていたが⁴⁵⁾、その後外壁が発見され9郭からなることが明らかとなった。城壁の平面形は基本的には波状を呈し、その曲線は美的ですらある。外城壁など部分的には等高線に沿うようにもみえるが、防御の点からはなぜ死角の多くなる曲線的な城壁を採用したのか明らかではない⁴⁶⁾。

また、周辺では集落跡も想定されているが、ミームングスクやターラグスクなどこれまで

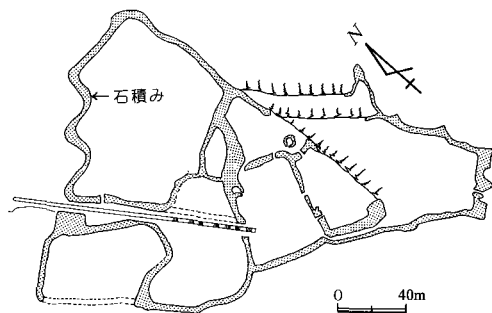


図9 今帰仁グスクの平面形態
『沖縄文化財調査報告』(1978)より作成

に知られていた以外にも石積み遺構が存在するよう⁴⁷⁾、これらと今帰仁グスクとの関係にも注意が必要であろう(図9)。立地や石垣の規模などから防御性の高いグスクといえる。しかし、城壁に曲線が多く城内からの死角が多い事は、どのように考えるべきであろうか。軍事上の観点のみでは律しきれない側面、つまり築城に関する文化的な側面、具体的には中国や朝鮮半島などからの築城技術への影響についても考慮すべきといえるだろう。

首里グスク：首里城はかつての琉球王国の都であった。その創建は不明であるが、山南王の配下にあった佐敷按司思紹父子が1406年に浦添グスクを攻め、思紹が中山王となった直後に、その子の尚巴志が首里グスクを整備

し、中山の拠点を浦添グスクから移したらしい⁴⁸⁾。琉球石灰岩の丘陵の独立丘状の部分を取り込んで2重の石垣で囲むが、急崖となっている南西部分は1重である。面積は約6万3千平方メートルで、外郭に4つ、内郭に8つの門があり、アーチ式の門が多い(図10)。王府が所在していたので琉球王朝時代の改築などによりグスク時代の構造は必ずしも明らかではないが、石垣は少なくとも防御という点から見て合理的な位置に構築されている。

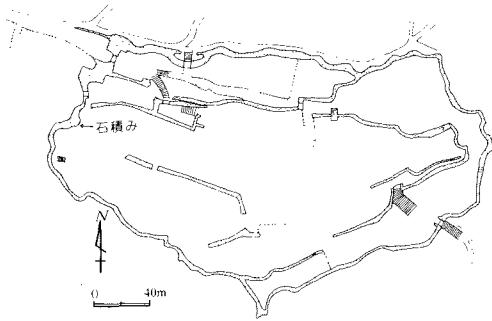


図10 首里グスクの平面形態
【日本城郭大系 第1巻】より作成

中城グスク：標高150メートルを超える石灰岩の丘陵上にある。すぐれた築城者とされる護佐丸が1422年に座喜味グスクからここに移封されてから改修をおこなったとされる。郭内面積は約1万3千平方メートル、城壁の総延長は1キロ近い。切石積みの城壁であるが、三の郭や裏門付近は石の積み方が布積みではなく、「亀甲乱れ積み」であり、この部分が護佐丸による改修部分とも考えられている⁴⁹⁾。最も発達した縄張りを残すグスクとされているが、縄張りの上で奇妙な点が指摘されている。すなわち、一の郭と二の郭の間の門、二の郭と三の郭の境の城壁、三の郭の東側城壁が、両脇が張り出す格好で、いわゆる軍学上の相横矢の構えになっているが、不必要なところにこのような構造がみられ、軍事技術が全く形式化して採り入れられているという。また、虎口まわりの構造、矢狭間の構造や武者走りの外側に墻壁があることなど築城に際しては

中国（あるいは高麗）の様式の圧倒的な影響が明らか、とされる⁵⁰⁾。

(3) 石垣のないグスク

今帰仁グスクでも創建当初は石垣が無かったことが明らかとなったが、北部のグスクには石垣の無いものが少なくない。また、かつては琉球王国の版図に含まれた奄美大島にもグスクの存在が知られているが、現在までのところいずれも石垣を有さず、堀切や土塁を設けている。発掘調査が行われた事例もまだ少ない⁵¹⁾が、本土の中世城郭との共通点も指摘されている。そこで沖縄本島における石垣をもたないグスクの例をみることにしよう。

名護グスク：名護市街地の東側背後の標高100メートルほどの丘陵に立地する。3方は比較的急な斜面で、東側の名護岳から派出する尾根に堀切を設けて遮断し、尾根筋からの侵入を防ぐ構造になっている。丘陵頂部が主郭で現在神アシャギがある。この東側に幅8メートルと2メートルの堀切が設けられ、グスク部分を尾根から切り離している(図11)。グスク北西の斜面は数段の削平地があり、その縁には石垣は認められないが、この部分が実質的には城壁の役割を果たしたとされる⁵²⁾。



図11 名護グスクの堀切 (1997年3月撮影)

恩納グスク：丘陵の先端に近い標高20メートルほどのところに立地し、南東から伸びてくる尾根筋側に大小の堀切を二重に設けて、上方からの侵入に備えている。基本的には名護グスクと同様、地形を利用して斜面に小規

模な郭を配し、防御する構造をとっている⁵³⁾。

このようにみえてくると、すべてのグスクをただ名称がグスクであるからといって同一のレベルで扱うことには問題が多いことが分かる。しかも、現在グスクと呼んでいるものの中には古くからそのように呼んでいたか疑問のあるものもある⁵⁴⁾ようである。多くのグスクの立地に共通する丘陵などの小高い丘があり、その頂部が平坦で拜所などがあると、多くのグスクに拜所等があることからの類推で同じようにグスクと呼ぶようになった、いわば二次的グスクがあることも考えてよいのかも知れない。つまり、グスクという呼称が拡大再生産されてきた可能性の検討も必要ではないだろうか。

V. グスクの空間的配置からの若干の検討

以上のようなことから、小規模なグスクについては本格的な城塞と考えるのは無理であり、むしろ近辺の集落と関わりのある見張り所的な施設の可能性を考えてもよいのではないだろうか。ここでは十分な資料もないので、可能性の指摘にとどめておきたい。

ところで、按司の存在に関して何等かの伝承を持つグスクはかなり多く(表1)、全体の2割近い38に達する。これらのほとんどは野面積みの石垣を備え、立地点の標高も概して高い。つまり、立地には防御の観点が大きな影響を与えていることを示唆している。また、その多くに中国の陶磁器が表面採集されたり、出土しており、遺物の面から直接・間接の中国方面との交易の活発化を伺わせている。これらの按司がそれぞれに合従連衡しながら勢力を得た3大按司が出現して成立するのが三山体制である。三山の内実は、各地でグスクに拠る按司のゆるやかな支配形態であり、三山の「王」といっても「按司連合体」の盟主という程度の地位であった。ことに山南では盟主の座を争い、しばしば内紛が生じていたようである。曲がりなりにも、この三山鼎立

は半世紀足らずの期間続いた⁵⁵⁾。その初期の段階における山北、中山、山南の拠点となったグスクは、当初はそれぞれ今婦仁グスク、浦添グスク、大里グスク(島添え大里グスク)であるが、この3山の勢力圏を検討するために、隣接グスク間の垂直二等分線による空間分割線を引いたものが図12の太い破線である。これにより、その勢力圏の大まかな在りようが推定できる。つまり、山北と中山の境界は国頭郡と石川市の境界付近となっている。この境界線の近くには恩納グスクと山田グスクが位置しており、前者は「このグスクの防備は主として南に向けられ、寄せ手の侵入は南からという築城者の意図がうかがえる。つまり、恩納グスクは中山の勢力に対抗するために築かれたグスクだということがわかるのである。…中略…恩納グスクの立地を検討していくとこのグスクが中山と北山の『境目の城』である」と考えられ、後者は「山北軍に対する北の盾として西海道のおさえ」と考えられている⁵⁶⁾。中山と山南との境界は那覇市と島尻郡との境界とほぼ一致する。また、安里らによれば、グスク時代中・後期⁵⁷⁾におけるグスク土器の胎土組成による地域圏の浦添地域と他地域との境界線にも対応するようであり⁵⁸⁾、注目される。このような簡単な事例から一般化するのには慎重でなければならないが、およその領域を考えるには参考になるであろう。

筆者はかつて弥生時代集落の空間的配置についてティーセンの多角形による検討を試みたことがあるが、そのときには中心地体系におけるような正六角形に近い配置パターンを見出すことは困難であるとした⁵⁹⁾。そこでつぎに、表1にあるグスクのうち、按司の居城であったとの伝承があるものでほぼ確実なものについて、その領域を検討する材料として、ティーセンの多角形による空間的配置についてみることにしたい。ティーセンの多角形による領域分割線を引くと図12のようになる。これらのグスクすべてが按司の居城であった

表1 按司の居城伝承をもつ沖縄本島のグスク

番号	名称	所在地	石積の特徴		琉球石灰 岩の存在	標高 (m)
			野面	切石		
1	根謝銘グスク	大宜味村謝名城	土?		—	110
2	今帰仁城	今帰仁村今泊	○	○	○	105
3	親川グスク	名護市親川	○		×	50
4	名護グスク	名護市城	土・堀切		×	103
5	上里グスク	名護市久志	—	—	×	30?
6	山田グスク	恩納村山田	○		○	95
7	座喜味城	読谷村座喜味	○	○	○	127
8	伊波城	石川市伊波	○		○	87
9	安慶名城	具志川市安慶名	○		○	40
10	具志川グスク	具志川市具志川	—	—	○	49
11	江洲グスク	具志川市宮里	土?		○	30
12	勝連城	勝連町南風原	○	○	○	98
13	知花グスク	沖縄市知花	○		×	87
14	越来グスク	沖縄市越来	○?	○?	×	80
15	北谷グスク	北谷町謝苺	○		—	30
16	安谷屋グスク	北中城村安谷屋	○		×	90
17	中城城	中城村字泊	○	○	○	160
18	棚原グスク	西原町棚原	—	—	○	130
19	幸地グスク	西原町幸地	土?		○	115
20	浦添グスク	浦添市仲間	○	○	○	130
21	伊祖グスク	浦添市伊祖	○	○	○	70
22	首里城	那覇市当之蔵町	○	○	○	136
23	小祿グスク	那覇市小祿	—	—	×	42
24	豊見城グスク	豊見城村豊見城	—	—	○	54
25	長嶺グスク	豊見城村嘉数	○?		—	98
26	八重瀬グスク	東風原町富盛	○		○	116
27	テミグスク	東風原町当銘	—	—	○	80
28	大城グスク	大里村大城	—	—	—	143
29	大里グスク	大里村西原	○		○	150
30	佐敷グスク	佐敷町佐敷	—	—	×	45
31	知念グスク	知念村知念	○	○	○	100
32	玉城城	玉城村玉城	○		○	180
33	糸数城	玉城村糸数	○	○	○	180
34	多々名グスク	具志頭村坡名城	○		○	91
35	具志頭グスク	具志頭村具志頭	○		○	50
36	南山城	糸満市大里	○		○	50
37	フェンサグスク	糸満市名城	—	—	○	25
38	米須グスク	糸満市米須	○		○	50

注) チングスクは『ぐすく』(1983)によれば「按司墓のひとつを称している。」とあるので按司関連グスクではあるが、単に按司墓をグスクと称しているということであるので、ここでは除外した。 ? : 不確実であることを示す。 — : 不詳 × : 付近に琉球石灰岩の存在が知られていない。

資料: 沖縄県文化課編『ぐすく』等による

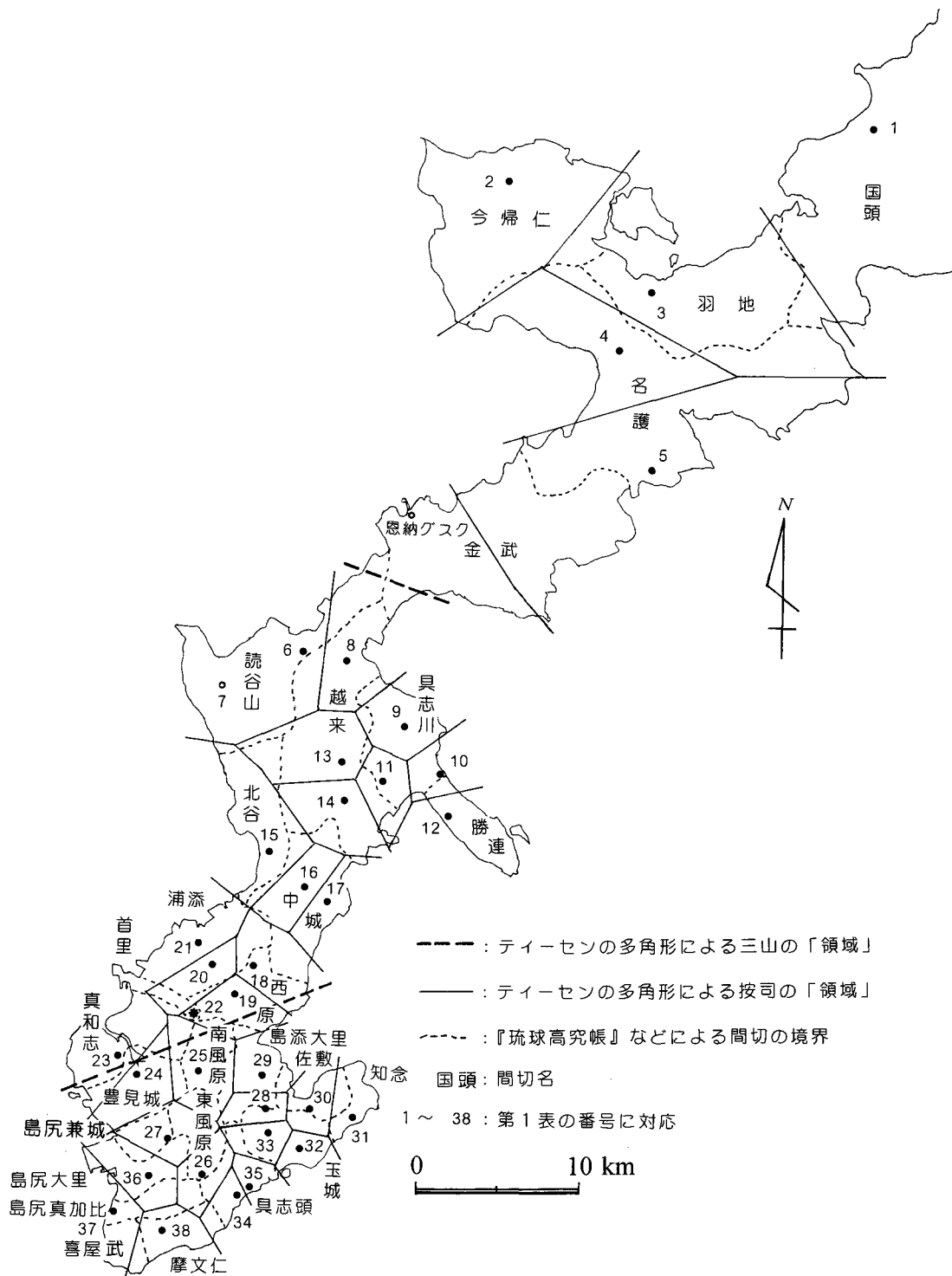


図12 ティーセンの多角形による按司の領域と間切の関係

ということはいえないし、またそうであったとしても按司にも盛衰があるので同時期に存在していたとは限らないなど問題点も多いが、按司の領域について全般的な傾向を把握することはできよう。按司関連グスクの分布も全グスクの分布傾向と大差はないが、名護市北部から本部半島付近の分布がやや少なく、1つのグスクの領域が広がっているのに対して、グスク自体の分布が多く、按司に関する伝承の多い島尻地方は特に海岸沿いで領域が狭くなっている。

ところで、安里は数千平方メートルを超え、多郭構成の大型城塞的グスクの出現を地域の政治的統合の画期とみて、その範囲を「寨」ととらえ、その領域は近世琉球の地方制度であった間切をいくつか含んだ地域であるとした⁶⁰⁾。つまり、「寨官」は在地首長である按司のなかの有力者であったとイメージされ、按司の領域は近世の間切にある程度踏襲されていることを予想させる。そこで、近世の間切⁶¹⁾との整合性についてみると、国頭、羽地、今帰仁、勝連、読谷山、北谷、真和志、豊見城、南風原、佐敷、知念の11間切は比較的よく一致しているといえそうである。これら以外にもいくつかのグスクの領域を接合すると比較的よく一致するというのがみられる。このようなことから15世紀の終わり頃の第二尚氏王朝の第三代尚真王のころに成立したとされる間切の設定には、首里の王府に集住させた按司たちの支配領域を考慮したものであったことが考えられる。按司が在地性の強い存在であったとすれば、いわば按司を首長とする地域共同体の地理的基盤の実質地域としての単位性にも配慮したものであったといえよう。

VI. おわりに

以上、いささかグスクに関するこれまでの既往の研究の紹介に紙幅を費やしすぎ、消化不良の感もあるが、要するにグスクと称されるものの実体が多様で、基本的にグスクとい

う一つの語でくくること自体にグスクの理解を難しくする要因があるといえる。「グスクの概念、呼称のなかには、御嶽、伝説的な按司の居城、その他の聖地などさまざまなものが混乱しているので、一つの立場で説明するのは困難である。」との松本雅明の指摘を思い起こすべきであろう⁶²⁾。つまり、実体がいまひとつ明らかとなっていない小規模グスクとそれ以外のグスクは少なくとも別のものとして考えるべきであろう。

さて、沖縄本島におけるグスクの分布をみると北部国頭地域には希薄で、南部島尻地域に大変濃厚である。グスクが農業生産力の発展の中で登場してきたことを勘案すると、農業生産の自然的基盤との関連に注目する必要がある。小稿においては、地質・地形・傾斜などとのマクロな対応関係をみた。その結果、琉球石灰岩が分布し、カルスト地形で、グスクの周辺の土地の傾斜が8度以下のところに特に多くのグスクが分布していることが明らかとなった。土地条件として傾斜が8度以下のところは一般に耕地化適地とされ、また、カルスト地域では地下水系が発達し、ポリエは生産適地となる。このようなことから農業との関連がうかがえ、農業を営む集落やその集団との関連についても検討の必要を示唆しているが、本稿では果たせなかった。

また、石を積んで巡らせるというグスクの築造は家族労働のレベルを超えたものであり、共同体の発展あるいは新展開なくしてはできないものであるから、琉球各地におけるグスク築造盛行の背景に共同体の政治的統合を読みとることも可能であろう。この点についても本稿では、「按司居城グスク」の分布から、ティーセンの多角形により、各グスクの領域の空間分割線を想定して、その示す領域は島尻南部地域を除くと中世に登場する行政領域である間切との整合性を指摘するにとどまり、周辺村落との関わりにまで及ばなかった。また、グスクの分布が少なく人口も少なかった

と考えられる今帰仁グスクを中心とする、かつての山北の「王国」の経済的基盤を、中南部と同様に考えることにも問題があるが、この点については他日を期したい。

なお、このほか規模や構造などについて検討を加えてみると、ムラの聖地あるいは拝所となっていて石積みの囲郭施設が確認できない小規模なグスクも多い。これらのグスクも立地としては他の石積みのあるグスクと特に変わるところがなく、そこにある聖地や拝所がグスク様立地をとっているため、後にグスクと称することになった可能性がある。このような場合には集落の移動や分村などの過程とも関連していそうで、後世にグスク名称の拡大再生産があった可能性の検証と共に、これら諸点については今後の課題としたい。

〔注〕

- 1) 安里進(1987・1988)：琉球—沖縄の考古学的時代区分をめぐる諸問題 上・下, 考古学研究, 34—3, 4, 65~84頁, 50~67頁, 当真嗣一(1985)：沖縄の時代区分をめぐる一とくに弥生相当期からグスク時代一, 考古学研究, 32—2, 46~63頁, など。
- 2) 鳥羽正雄(1980)：沖縄の城郭の種類および構造(鳥羽正雄(1942)『日本の城』大東急記念文庫, 鳥羽正雄(1980)『日本城郭史研究叢書1 日本城郭史の再検討』に再録, 名著出版), 292~313頁。
- 3) 前掲2)。
- 4) 比嘉春潮(1959)：『沖縄の歴史』沖縄タイムス社(『比嘉春潮全集第1巻歴史篇I』, 1971, 沖縄タイムス社, に所収) 21頁。
- 5) 鳥越憲三郎(1966)：『琉球宗教史の研究』角川書店, 100頁。
- 6) 仲松弥秀(1961)：グシク考, 沖縄文化, 5, 18~23頁。
- 7) 仲松弥秀(1977)：『古層の村』沖縄タイムス社, 221頁。同(1981)：沖縄のグスクと聖域, 歴史手帖, 9—4, 26~33頁, など。
- 8) 平野邦雄(1970)：勝連城跡調査の意義, 日本歴史, 269。
- 9) 国分直一(1970)：グシクをめぐる問題, 南島

考古, 1, 4~8頁。

- 10) 高元政秀(1969)：「グシク」についての一試論, 琉大史学, 1, 5~18頁。同(1971)：再び「グシク」について, 古代文化, 23—9・10, 251~257頁。同(1977)：沖縄のグスク, (上田正昭編『日本古代文化の探求 城』社会思想社), 175~203頁, など。
- 11) 田村浩(1927)：『琉球共産村落の研究』岡書院(1977年復刻, ペリかん社), 93~95頁。
- 12) 前掲9)。
- 13) 仲松弥秀(1973)：再「グスク」考, 南島考古, 3。
- 14) 高良倉吉(1973)：沖縄原始社会史研究の諸問題—考古学的成果を中心に—, 沖縄歴史研究, 10。
- 15) 友寄英一郎(1975)：再グシク考, 南島考古, 4, 39~47頁。
- 16) この点に関しては, 安里進が適切にコメントしている。安里進(1979)：考古学におけるグシク論の整理と問題点—階級社会形成過程論争への止揚—, 新沖縄文学, 42(藤本英夫・名嘉正八郎編(1980)：『日本城郭大系 第1巻』新人物往来社, 331~335頁, に再録)。
- 17) 沖縄県教育庁文化課編(1983)：『沖縄県文化財調査報告書第53集 ぐすく グスク分布調査報告(Ⅰ)—沖縄本島及び周辺離島—』沖縄県, 189頁。
- 18) 前掲17), 3頁。
- 19) 以下において, 個別のグスクに関する記述には沖縄県教育庁文化課による『ぐすく』を全面的に参照したが, 煩雑となるのを避けるためにいちいち参考文献として挙げないこととし, それ以外の文献についてのみ挙げることにする。
- 20) 断層面に沿って石灰岩が硬化され, 差別侵食により尾根状に取り残されて形成された堤状の地形。
- 21) 前掲7)仲松(1977), 15頁。
- 22) 国土庁土地局国土調査課(1977)：『土地分類図 沖縄県』, 7頁。
- 23) 新城徳祐(1982)：『沖縄の城跡』緑と生活社, 513頁, 前掲10)高元(1977), 前掲7)仲松(1981), 前掲17), など。
- 24) 安里進(1991)：グスク時代(下條信行ほか編『新版古代の日本 3 九州・沖縄』角川書店), 491~492頁。
- 25) 前掲4), 前掲17), など。

- 26) 前掲17), 18頁。
- 27) 前掲17), 前掲23), などによる。
- 28) 前掲22), 10~15頁, および土壕図。
- 29) 前掲23), 19~21頁。
- 30) 国の指定史跡となった部分の面積。
- 31) 当真嗣一(1985): 考古学上より見た沖縄のグスク, 沖縄県文化課紀要, 2, 1~23頁。
- 32) ごく少数ではあるが土塁や堀切の場合もある。
- 33) 村田修三(1985): 「縄張り把握と発掘, 協力へー城郭研究の現状一」, 読売新聞夕刊, 1985年8月16日。
- 34) 当真嗣一(1991): グスクとその構造, (石井進・萩原三雄編『中世の城と考古学』新人物往来社), 547~582頁。また, グスク聖域説に対して, 勝連城跡の御嶽の例から「グスクが御嶽や聖域となるのは, グスクが機能を失って以後のことではないか」としている(前掲1), 59頁)。
- 35) 横山勝栄(1991): 山間地域の小型城郭, (石井・萩原編, 前掲34)), 349~380頁。
- 36) 高良倉吉(1993): 『琉球王国』岩波書店, 39~48頁。
- 37) 村田修三(1990): 城郭概念再構成の試み, (村田修三編『中世城郭研究論集』新人物往来社), 34~38頁
- 38) 前掲1)安里(1987), 79~83頁。
- 39) 名護市教育委員会(1982): 『名護市の遺跡(2)』, 42~45頁。
- 40) 前掲17), 143頁。
- 41) 前掲23), 162~166頁, 前掲17), 54頁。
- 42) 恩納村に位置する30メートル×160メートルほどの規模の山田グスクでは, 多郭構造で当グスクとの違いはあるが, 主郭部で3間×3間の掘立柱建物跡が検出されている。前掲34), 564~571頁。
- 43) 前掲23), 271~276頁, 知念村教育委員会(1986): 『知念村の遺跡一詳細分布調査報告書』, 26~27頁。
- 44) 前掲1)安里, 77頁, 当真嗣一(1990): グスクの石積みについて 下, 沖縄県教育委員会文化課紀要, 6, 41~62頁。
- 45) 沖縄県教育委員会監修(1978): 『沖縄文化財調査報告 1956~1962』那覇出版社, 543頁。
- 46) 籠瀬良明(1982): 沖縄の城にからむ二つの疑点一沖縄の城 序説一, 地理誌叢, 24-1, 5~18頁。
- 47) 今帰仁村教育委員会(1986): 『今帰仁城跡周辺遺跡範囲確認調査報告書』, 80頁。
- 48) 前掲36), 49~50頁。
- 49) 前掲23), 211~215頁。
- 50) 前掲37), 35~37頁。村田のグスクの防御構造に対する評価は「ただただ, 石塁をまわすべし, 隅を張り出すべし, という教条だけが守られているといわざるを得ない」(38頁)としている。
- 51) 中山清美(1997): 奄美のグスク考一万屋グスクの発掘調査から一, (龍田考古学会編・発行『先史学・考古学論究II』), 223~246頁。
- 52) 前掲34), 558~561頁。
- 53) 前掲34), 562~564頁。
- 54) 『ぐすく』26頁の「喜如嘉グスク」について報告者は「グシクと呼ばれる一帯は, 赤土マージ層で石塁もなく遺物も全く見当たらない。喜如嘉グスクを語る文献史料もなく, 古き時代から「グシク」と呼んでいたのか明らかでない」としている。
- 55) 前掲36), 43~48頁。
- 56) 前掲34), 562~571頁。同(1987): 歴史の道とグスク, 沖縄県教育委員会文化課紀要, 4, 1~9頁。
- 57) 三山鼎立時代を含む時期にあたる。
- 58) 安里進(代表)(1980): グシク土器の地域色と「くに」・「世」一沖縄本島中・南部を中心に一, (国分直一博士古稀記念論集編集委員会編『日本民族文化とその周辺 考古編』新日本教育図書), 505~506頁。ただし, この研究の場合, 南部地域が中心で浦添周辺の事例が少ないという問題がある。
- 59) 出田和久(1992): 弥生時代集落の空間的配置一ティーセンの多角形による若干の予察的検討一, 地理学報, 28, 87~94頁
- 60) 前掲1)安里, 79~83頁。
- 61) 間切もいつの時点でのものかが問題となるが, ここでは『琉球国高究帳』をもとに高良により作成された「古琉球の間切区分図」を用いた(前掲36), 144頁)。
- 62) 松本雅明(1970): 沖縄における神女とその起源(窪徳忠編『沖縄の社会と習俗』東京大学出版会), 44頁。

(付記)

本稿は歴史地理学会第40回大会において、戸祭由美夫、野間晴雄、鬼塚久美子、佐野静代の各氏と合同で「グスクの配置システムに関する若干の検討」として行った発表を基礎にしている。各位には記して深謝致します。

本研究には文部省科学研究費補助金(平成6年度～平成9年度一般研究(A)(平成8年度以降は基盤研究(A))、代表：戸祭由美夫、課題番号

06401017)を使用した。また、現地調査および資料収集に際して、沖縄県教育庁文化課の我那覇念氏をはじめ関係市町村の文化財関係の方々には大変お世話になりました。記して深謝致します。なお、資料整理および製図には奈良女子大学大学院生の宮崎良美さん、小林和美さん、小林啓子さん、文学部学生中島のぞみさん、長友かおりさんの助力を得た。記して感謝したい。

Some discussions on the *Gusuku* and its spatial arrangement

IDETA Kazuhisa

There are many sites which are called *Gusuku* in the *Ryukyu* Islands. Most of them have stone walls and they were constructed between the 13th century and 16th century. Though the actualities of *Gusukus* are still unknown, some scholars consider that *Gusukus* are a sort of castle or, fort some consider them a kind of sacred place. There are many interpretations about the nature of *Gusukus*.

Recently the big reports on the distribution of *Gusukus* were published by the *Okinawa* Prefectural Agency for Cultural Affairs. This book are regarded as a basic data-base on *Gusukus* and are expected to promote research on *Gusukus*. So this paper discuss the functions, forms and the spatial arrangement of *Gusukus*.

Some *Gusukus* have been excavated and the archaeological investigations of *Gusukus* have been making. We examine the archaeological results and location and spatial arrangement of *Gusukus*. We reach the conclusions as follows:

1. The *Gusukus* are so various in forms and functions that it is not pertinent to understand all of them a kind of military defense facilities or a kind of sacred place of neighbouring settlements.
2. The *Gusukus* are divided into three types according to their sizes : A large-scale *Gusuku* such as *Shuri-gusuku* and *Nakijin-gusuku*, is several ten thousands square meters in area, and is the most important castle of the country. A middle-scale *Gusuku*, several thousands square meters in area, is for of *Aji* , who is a kind of a regional lord in ancient *Ryukyu* Islands. A small-scale *Gusuku* is several hundreds square meters in area, and most of them are a sacred place for praying.
3. The territory of a midle-scale *Gusuku* is approximately correspond to that of *Magiri*, which is the administrative district in the middle ages to modern ages in the *Ryukyu* Dynasty.